【326】

氏　名（本籍）	松本　肇（茨城県）
学位の種類	博　士（文　学）
学位記番号	博　乙　第　1685　号
学位授与年月日	平成13年1月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	文芸・言語研究科
学位論文題目	柳宗元研究

主　査	筑波大学教授		向嶋成美
副　査	筑波大学教授	博士（文学）	荒木正純
副　査	筑波大学教授		犬井善壽
副　査	筑波大学教授		芳賀紀雄
副　査	筑波大学教授	文学博士	堀池信夫

論文の内容の要旨

本論文は，中国中唐期の文人，柳宗元が，政治家として不遇な立場にありながら，その「敗北」の意識をどのような形で文学作品に詠いあげたかについて，柳宗元の文学全般にわたって考究したものである。

本論文の構成は以下の通りである。

序

第一編　敗者の美学

　第一章　左遷の中の文学

　第二章　敗北の逆説　－　寓言論

第二編　自然との対峙

　第一章　「永州八記」について

　第二章　山水詩　－　宗教から文学への転回

　第三章　草木を植えるうたの位相

第三編　古文家の絆

　第一章　文学論のめざすもの

　第二章　韓柳友情論

第四編　否定の深層

　第一章　「非国語」について

　第二章　自己処罰の文法

　第三章　飛べない鳥

結

第一編は，著者の柳宗元研究の基本的立場が表明されたもので，柳宗元の政治的敗北に積極的意味を見出そうとする論が展開されている。まず第一章の「左遷の中の文学」においては，中央のエリート官僚から永州への左遷が柳宗元の内面と文学とに何をもたらしたかを考察している。永州左遷後の柳宗元が自らの希求する「道」を「文」と結合させることによって不遇を克服できたこと，士大夫としての正義を貫くための原理として「柔外剛中」

の認識を深化させたことを論じ，また駢文から古文へと文体を変化させたことは，政治的敗北を克服し文学の世界で自らを蘇生させようとする積極的姿勢の表出であったと説いている。第二章の「敗北の逆説－寓言論」では，柳宗元文学の特徴とされる寓言作品を取り上げ，その分析を通して，柳宗元における「敗北」の意味をさらに考究している。すなわち著者は，柳宗元寓言作品に逆説的な発想を持つもののあることを指摘し，柳宗元は特に愚者の美を讃えることによって自己の正義を証明しようとしたのだと考える。

第二編は，山水や草木など自然をテーマとする作品を取り上げ，左遷後の柳宗元が異郷での自然にどのように立ち向かおうとしたかを論じている。第一章の「永州八記について」では，柳宗元の「永州八記」を分析して，元結，韓愈の影響，さらには『水経注』の表現方法の反映などを指摘し，また前四記と後四記との差に着目して，特に後四記に著者である自己を客体的に投影しようとする風景描写に異郷を故郷と見做す意志の形成を認めようとする。続く第二章の「山水詩－宗教から文学への転回」は，柳宗元の永州時代の山水詩を前期と後期に分け，その変化の様相について考察したものである。永州前期の山水詩が叙情を主とし，宗教への関心が強いのに対し，後期の山水詩が叙景を主とするところから，柳宗元は不遇な現実を救済する手段を宗教から文学へと転回させたと説く。第三章の「草木を植えるうたの位相」では，草木を植える詩の歴史的変遷を辿りつつ，柳宗元の作品の特色を検討している。柳宗元は時間の推移を植物の生長のイメージによって捉え，敗北者としての自己を『楚辞』の屈原に同化させながらも，特に柳州時代にあっては未来へ期待を寄せる意識を突出させたとする。

第三編は，古文家としての柳宗元の文学論を考察し，さらには中唐期における文学者の交流を見るため，柳宗元と韓愈との友情について考察している。まず第一章の「文学論のめざすもの」では，柳宗元の文学論が唐代古文家の文学論の中でどのような位置を占めるかについて考察し，柳宗元が目指したのは芸術的表現の追求であったと説く。また第二章の「韓柳友情論」では韓愈と柳宗元との間には文学に対する共通の認識があったことを指摘し，韓愈の「順宗実録」成立に柳宗元が深く関わっていたことを説いている。

第四編は，柳宗元における否定の意志の深層にあるものを追求したものであり，柳宗元の否定への意志は自らの敗者とする意識と深く関わっていて，またその裏には逆説的な意味が込められていることを論じるものである。まず第一章の「非国語について」では，柳宗元が『国語』を愛読しながらも『国語』を批判していることに注目し，柳宗元の『国語』批判の根拠は『国語』そのものに内在していること，さらに『国語』に依拠しながら『国語』を否定するという一見矛盾した行為には，自らの敗北の体験を昇華させるための逆説的な意味が込められていたとする。第二章の「自己処罰の文法」は，柳宗元が政治世界での失敗を自らの責任に帰せんとする書簡文（弁明文）を取り上げ，それが中国の自責の文学の系譜の中でどのような位置を占めるかについて考察している。中国の自責の文学は，真の自己処分を目的としないのが伝統であって，それは柳宗元の否定への意志を最もよく吸収し得るものであったこと，さらに自責は柳宗元にとって逆に自負心の表明であったと説く。そして第三章の「飛べない鳥」においては，柳宗元の詩に見える「飛べない鳥」を取り上げ，過去の詩人の作と比較しながら，柳宗元の独創性を考察している。柳宗元が「飛べない鳥」を詠じた三首の連作はその配列に重要な意味が含められていて，政治的敗北からの救済がテーマとなっており，そこに柳宗元の心の軌跡が示されていることを論じている。

著者は，最後に，柳宗元の文学が政治的敗北から出発し，この敗北の体験をいかに克服するかが課題となっていたこと，また柳宗元は「敗北」そのものの中に美を見出すことで，中国における「敗者」の文学の系譜に新しい展開をもたらしたことを説いて，本論文全体の結論としている。

審査の結果の要旨

本論文は，柳宗元の文学を「敗北の逆説」あるいは「敗者の美学」という視点から捉えて論じているところに最大の特色を持つ。この「敗北の逆説」「敗者の美学」という考え方は，著者が自らの柳宗元研究の基本的立場を明らかにするために設けている第一編の「敗者の美学」を初めとして，第四編の「否定の深層」に至るまで，本

論文に一貫して流れている基調といってよい。著者の柳宗元理解は絶えずこの考え方に沿ってなされるのである。

著者が柳宗元の内的意識の面に関心を向け，しかも「敗者」の意識を考察することで論を一貫させたのは，有効な方法であった。著者自身が本論文の序で述べるように，政治世界での挫折が契機となって，文学に意義を見出そうとするのは司馬遷の「発憤著書説」に典型的に認められるところであって，中国の知識人にとっては一つの普遍的な姿勢となっている。ところが著者は，こうした認識を基礎としながら，柳宗元はむしろ「敗北」そのものの中に美を見出そうとしたという論を新たに提示した。これは著者独自の見解であり，柳宗元研究に新生面を開いたものとして評価できる。

本論文は，柳宗元の内的意識を探ろうとする作業の中で，その作品解釈についてはまた多くのすぐれた指摘を行っており，これも評価に値する。例えば，第二編第一章の「永州八記について」において，「永州八記」に『水経注』の山水の表現方法が反映しているとする点，また第二編第二章の「山水詩－宗教から文学への転回」において，「漁翁」や「江雪」が唐代の「漁父歌」の系譜に連なる作品であることを論証するところなどがそれである。さらには，第二編第三章の「草木を植えるうたの位相」において，柳宗元の草木を植えるうたが中唐期における流行の中で生み出されたとする指摘や第四編第三章の「飛べない鳥」において，中唐期になって飛べない鳥のイメージが豊かになったとする指摘などは，著者の関心が柳宗元個人から広く中唐詩全体を及ぼうとしていることを物語るものであるが，これまた興味深い検討といってよい。これらはいずれも学界に寄与するところが大きく，本論文の価値を高めている。

本論文は，以上のように多くのすぐれたところを持ちながらも，その細部に関しては，なお問題とすべき点がなくもない。第三編「古文家の絆」の二つの章は，それぞれ独立した論としては見るべきところが多いが，「敗北の逆説」「敗者の美学」を軸とする本論文全体の流れの中ではやや遊離している憾みがある。また第四編で取り上げられる「否定」については，その対象となるものへの追求が乏しく，それを明確にすることが今後の課題として残るであろう。さらに言うならば，文献の扱いについて多少慎重を欠くところがあり，より厳密な態度が望まれる。しかし本論文は，部分においては如上の瑕瑾があるとはいえ，柳宗元研究に確実な貢献を果たしたものと認められ，今後の研究者に裨益するところは極めて大きい。

よって，著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。